

米国大学生の“international であること”の捉えに関する研究

早矢仕 彩 子*

A Study of American University Students' International Awareness

HAYASHI Saiko

要 約

本研究は、米国州立大学学生が“international であること”の意味をどう捉えているかを明らかにするために実施した質問紙調査結果をまとめたものである。有効回答数は262であった。international であることに最も大切なこととして選択されたものは、「外国人」大カテゴリーの記述が最多であり、次に多かったのは「知識・知的・経験」大カテゴリーに属する記述であった。記述内容からは、international であるということは自国の外に出た状態という意味合いが強く、外国経験のない米国人学生の多くは、外国から米国に来て生活をしている外国籍の人を思い描く傾向が高いこと、また international であることについての評価は高いことが伺われた。international であることに外国経験を重視している結果、米国人学生は自分自身が international であると意識している程度は低かったが、international であることは有用なことであり、今後 international になるよう努力したいという希望は強いという結果が示された。

キーワード：international であること 外国人 語学能力 多様性 外国経験

1. 問題と目的

米国は1776年の独立宣言以来まだ230年余であり、建国の時から移民を主体とした多人種多民族で作られてきた国である。ヨーロッパからの多くの移民、アフリカ大陸から奴隷として連れてこられた人々、そしてアジア・太平洋地域、南米から等、世界中の様々な国から様々な肌の色、様々な文化を持った人たちがアメリカ大陸にわたり、住み着いてきた。もちろん、それまでに既に大陸に居住していた先住民族も相当数存在する。現在でも米国は毎年何十万人もの移民を受け入れている。南米からのいわゆるヒスパニック、韓国人中国人日本人などの東アジアからの人々、ベトナムインドなど東南・南アジアの人々、そして中東の人々など、移住をする人たちが後を絶たず、以前から多いヨーロッパ系の

人々とともに、米国国内には多種多様な人々が暮らしている。

かつては人々が溶け合って一緒に暮らしているという意味で、米国は“人種のるつぼ”と言われていた。るつぼ(溶解炉)の中で色々な原材料が溶け合ってガラスという一つの新しい物質が生み出されるように、色々な人種民族が溶け合って新しい文化を創りだしてきたという表現であるが、最近では、一つの文化はその独自性が尊重されるべきであり、多様性を大切にすべきだという考え方から、米国社会は“モザイク社会”または“サラダボール”であると言われるようになってきた。多様な文化的民族的背景を持った人たちが、それぞれの特徴を持ったまま共存共栄している社会という意味である。

一方日本は、かつて在任中の総理大臣が国際舞台で“日本は単一民族の国”と発言して輿論を買ったことがあるが(1986)、その後も政治家による同様な発言が後を絶たない。このような発言がうっかり出てしまうような社会的感覚、社会的構造があるから

* 中部大学現代教育学部児童教育学科
中部大学現代教育学研究所

である。国の中に少数民族や在日2世3世などの存在があるにもかかわらず、似たような相貌であること、今ではほとんどが日本語によるコミュニケーションを行っていることから、この狭い島国に暮らしている人々は均一な人々という錯覚を持ってしまいがちなのである。さらに地理的な独自性の影響もある。西欧世界からの呼ばれ方は極東 (the far east) である。西欧から見ると、かつては地理的にも非常に遠い世界の果てのような訪れにくい場所であった。それに加えて江戸時代の250年間にも及ぶ鎖国という政策もあり、その結果日本の庶民が外国人、特に西洋人を目にする機会はほとんどなかった。明治大正昭和と過ぎてかなり最近になってからも、日本人は外国人を見ると珍しいものでも見るようにジロジロ見てしまうと言われていたが、外国人と見るとそれだけで緊張する。最近になってやっと外国人とのつきあいに慣れてきた様子が見られるようになってきたが、しかしまだ自然体というにはほど遠い。

このような日本と米国と国の成り立ちや歴史的経緯を見ると、外国や外国人に対する態度、また international であること (国際的であること) に対する捉え方など、その感覚や考え方には、日本人と米国人とでは色々な点において相違があるのではないかということは容易に想像ができる。一昨年度、筆者は中部地方の私立大学 (以下 A 大学) 学生に対する質問紙調査を行いその結果をまとめたが (早矢仕、2009)、同年その質問紙をもとにして作成された英文質問紙を用いて、米国州立大学 (以下 B 大学) において international であることについての質問紙調査を実施した。本稿ではその結果について報告する。

2. 研究方法

2-1. 調査手続

2009年9月-10月、米国B州立大学学部生を対象に質問紙調査を行った。教育学部の複数の教員に依頼して、担当する複数の授業時間の一部を利用して、受講生に対する無記名の調査を実施してもらった。担当教員によって調査用紙配布、回収が行われ、262枚の調査用紙が回収された。事前予備テストでは調

査用紙記入時間は約10分間、長くても15分間程度であった。調査対象者は1年生から4年生までの学生であり、さまざまな専攻の学生たちであった。

2-2. 質問紙の構成

質問紙の構成は以下の通りである。フェースシートでは年令、性別、専攻を記入、氏名欄は設けず無記名とした。質問1では、「What does it mean to be international? Please identify a few characteristics of a person who you consider to be international. Please think of as many examples as possible.」のあとに a-j まで10行の自由記述欄を設けた。質問2では、Of the characteristics you listed above, which do you believe to be the single most important feature of being international? と質問1の回答のうち1番大切だと思うもの、質問3では同様に the second single most important feature (2番目に大切だと思うもの) を問い、その記号を記入してもらった。次に質問4では、自分自身の international である程度を、質問5では、現代社会において international であることが有用であるかどうかを、質問6では、international となるように努力したいと思う程度を、それぞれ5件法で評定させた。さらに質問7では、外国への居住または旅行についての希望を5つからの選択式で回答を求め、質問8では、米国内での外国人とのつきあいの意欲について5つの選択式で、質問9では、自文化他文化に対する態度 (文化的態度) をあらかず文章のうち最も自分の考えに近いものを選ばせた。質問10では半年以上の留学または海外滞在経験の有無、国、期間、外国人との親しいつき合いの有無、関係、期間、外国旅行の経験の多少または無、回数、主な旅行先、日数、外国滞在 (在住) の経験の有無、主な滞在先、期間、など異文化経験についてたずねた。

3. 調査対象者の属性と分析までの準備

3-1. 調査対象者の属性

調査対象者のほとんどの学生の国籍は米国であり、日本1名カナダ1名、米国と外国 (オランダ、カナダ) との二重国籍が2名の他258名はすべて米国籍である。年令は18-22才が92.7%を占めてい

る（18才38名、19才44名、20才64名、21才72名、22才25名、23才8名、24才以上8名、無記入3名）。性別は、男性83名女性173名不明6名である。専攻については、空欄に各自が記入する回答方式であったため、略号の使い方、表現方法などが回答者によってまちまちで正確な専攻名の同定が困難なものもあり、おおざっぱな分類とした。教育学部所属教員の担当授業での調査であったため、大多数の学生が日本でいえば文系学部学科に分類される専攻であった。教育系167名、経済・ビジネス系44名、人文系・心理・医療系25名、コミュニケーション・ジャーナリズム系12名、未定11名、無記入3名である。

3-2. 評定のためのカテゴリーの作成

質問紙では International であることについての複数の自由記述の中から、1番大切なもの、2番目に大切なものをそれぞれ選んで該当欄に記号で記入してもらったが、1番大切なものとして選ばれた記述を用いて、まずはカテゴリー作成の作業を行った。方法は、あらかじめ仮分類枠を作成し、各記述がどのカテゴリーに入るかを評定していったが、その過程で分類枠の修正、下部カテゴリーの増減などの作業も行った。調査対象者から得られた記述は文章もあったが、単語熟語のみのものもあり、どういう意味合いやニュアンスで書かれたものかその単語熟語だけでは判断が難しい場合もあったが、ほとんどの調査対象者は複数個（平均6〜7個）の記述をしていたことから、判断が難しい場合は他の記述と照らし合わせて回答者の回答意図を汲みながら、その文脈から判断して評定作業を行った。

さらに2番目に大切なものについての記述についても同じ仮分類枠で分類が可能かどうかを確認するために、同様な手続きで評定作業をしたが、性格特性・行動特性の大カテゴリーのなかに小カテゴリーを一つ加えるという修正で評定が可能であった。このような手続きを経て、2番目に大切なものの評定終了時の6個の大カテゴリー、19個の小カテゴリーからなる分類枠を採用、Table 1. のように確定した。なお研究者は英語を母語とする者ではないために、口語的表現や英語綴りの間違いなど判断の難しい記述の際には、北米で大学教育を受けた後30年

Table 1. international であることに大切なものカテゴリー

大カテゴリー	小カテゴリー
I. 外国人	I-1. 異国籍・外国人
	I-2. 異人種・異民族
	I-3. 誕生地・生育地
	I-4. 外国から米国
	I-5. 短期間在住・留学
II. 言語	II-1. 英語以外を話す
	II-2. 他言語・外国語
	II-3. 英語に問題
III. 異文化・多様性	III-1. 異文化
	III-2. 多様性
IV. 知識・知的・経験	IV-1. 教養・知識・知的
	IV-2. 政治知識・考え方
	IV-3. 異文化理解・他国理解
	IV-4. 他場所を経験
V. 性格特性・行動特性	V-1. 広い心
	V-2. 積極性
	V-3. その他の特性
	V-4. 交友・活動
VI. その他	VI-1. その他

以上にわたって北米大陸で仕事についての経験の持ち主で、高等教育を受けた英語母語者と同等の英語力を有する人の助言を受けた。

3-3. international であることに1番大切なもの、2番目に大切なものの確定

次に、複数の回答者の記述に、1番大切なもの欄、2番目に大切なもの欄に適切に記入されていないものもあったため、1番大切なもの2番目に大切なものの確定作業を行った。その方法は、自由記述が1つのみの場合は1番大切なもの欄に記入がなくても1番大切なものと判断し、2つのみの記述のうち一方が1番大切なもの欄に書かれている場合には、他方が2番目に大切なものと判断するというものである。また3つ以上の記述があるもので1番大切なもの、2番目に大切なもの欄に記入がされていないものは1番2番の評定からは除外した。さらに、意味不明の記述3個、質問意図に合わない記述1個も除外した。この結果、1番大切なもの2番目に大切な

ものは、それぞれ 259 個 256 個となった。

4. 結果と考察

4-1. international であることに 1 番大切なもの
有効回答数 259 の international であることに 1 番大切なものの回答結果は Figure 1. に示した通りである。

「外国人」大カテゴリーの回答が圧倒的多数であり、ほとんど半数に近い 112 人がこのことを 1 番大切なものとして選んだ。米国人学生は、“international であること”の意味を尋ねられたとき、彼らがまず思い浮かべる international な人とは、米国内にいる外国から来た人（特に留学生）であるらしく、その人を説明するために思い浮かんだ文章や語をその回答として記述したものと考えられる。調査対象者の中に『自分がもし外国に行ったら、その時は自分が international である』と答えた学生がいたが、米国人学生にとっては international であることは第 1 義的には“国外にいること”“国外にいる状態”であるようである。112 の「外国人」大カテゴリー

のなかの、小カテゴリーをみると、「外国から米国」（外国出身であること、米国以外から米国に移動してきた、などの記述が入る）に分類されたものが 56 と最多で、次に多いのは「異国籍・外国人」小カテゴリーに分類されたもので 24、「誕生地・生育地」小カテゴリー（外国で生まれた、育った、外国で育ち後に米国に来た、などの記述が入る）に分類されたものの数は 19 である。「異人種・異民族」小カテゴリーに入る記述は 7 と少なく、米国人学生の意識の上では、international であることを説明するものとして民族や人種が違うという記述は比較的少なかった。これは米国国民が多人種から構成されているという事実、また、political right の考え方（差別的なことを口にしないことが正しいこと）の影響も考えられるが、彼らの意識の中では、客観的に最近外国から来たという事実が重要であり、どこからきたのかどんな民族でどんな肌の色の人なのか等にはあまりこだわっていないかのように思われる。international であることについての記述内容が全般的に淡々としたもので、また客観的かつ記述的であり、外国から来た人への差別意識や下に見る意識を感じ

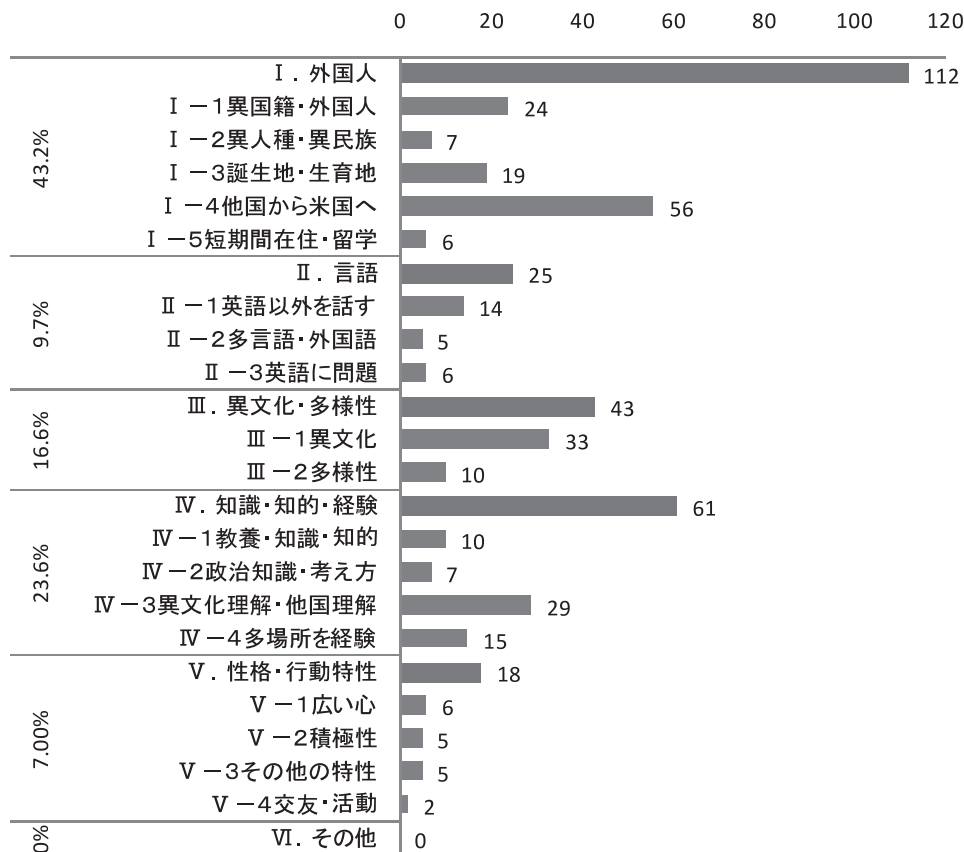


Figure 1. international であることに 1 番大切なもの (259 名 259 個)

させるような記述はほとんどなかった。米国は歴史的に大勢の移民を受け入れてきたこと、自分たちのルーツをたどればその多くが国外から移住してきた先祖にたどりつくという事実、米国国内における長い間の人種差別の歴史に対する反省などが、現代米国人学生の人種的差別や移住者への差別をできるだけ少なくしたいという意識につながっているからかもしれない。

2 番目に回答数が多かった大カテゴリーは「知識・知的・経験」で、61 個の回答があった。これらは、‘異文化理解・他国理解’小カテゴリー（異文化を理解している、他国の文化を尊重できるなど）29、‘他場所を経験’小カテゴリー（他の土地を知っている、いろいろなところを訪れている、旅行が多いなど）15、‘教養・知識・知的’小カテゴリー（教養がある、知識が多い、知的であるなど）10、‘知識・考え’小カテゴリー（世界の政治に詳しい、Global な考え方など）7、の 4 つの小カテゴリーからなる。これらのカテゴリーのいずれの記述も、こういう特性をもつ international な人々を肯定的に見ていることが分かるものであり、international であることを“すごいなあ”と感嘆しているようなニュアンスが伝わる記述がしばしば見られた。

また、3 番目に多かったのは「異文化・多様性」大カテゴリーで 43 である。これは‘異文化’小カテゴリー（異文化を経験している、他の文化を知っている、など）33、‘多様性’小カテゴリー（diversity）10 であった。この大カテゴリーの記述も、肯定的な記述であるか、または他の文化、多文化、diversity、などのニュートラルな記述であった。

4 番目が「言語」大カテゴリーに属するもので、25 の記述がここに分類された。これらの内訳は、‘英語以外を話す’小カテゴリー（different language、another language など）14、‘多言語・外国語’（multi-lingual, bilingual, other language than English など）5、となっており、以上の 2 つは語学力についての肯定的またはニュートラルな表現であるが、3 つ目の小カテゴリー‘英語に問題’の 6 つの記述のみが、英語に癖がある、英語力が不十分、などの否定的なニュアンスにも受け取れるものであった。これまでの述べてきたいずれのカテゴリーにおいても否定的なものはほとんどなかったのだ

が、言語のカテゴリーにおいてはじめてそのようなニュアンスのものが見られた。米国人学生は、基本的には、international である人はすごいなあと称賛する気持ちが強いのであるが、英語の表現力、アクセント等についてはその困難さを認め、第 2 言語として英語を使う人に対して少々の優越感を抱いている部分があるのかもしれない。

4-2. international であることに 2 番目に大切なもの

international であることに 2 番目に大切なものの回答結果は Figure 2. に示した通りである。

「外国人」という大カテゴリーの回答、「知識・知的・経験」大カテゴリーの回答が同数で最も多く、ほぼ 1/4 ずつの 62 の回答が、それぞれこのカテゴリーのものであった。次に多かったのが「言語」大カテゴリーで 55、4 番目が「異文化・多様性」の大カテゴリー 50 である。そして「性格・行動特性」大カテゴリー 23 と続く。1 番大切なものとして選ばれたものと、大カテゴリーの回答数の多さで順序づけると、3 位と 4 位が逆である他は同じ順となった。

ここでも、外国人・外国から来た人は知識が多く、知的であり、また経験もたくさんある、と international であることに対する肯定的な記述が多かったことは興味深い。「言語」大カテゴリーの記述においても、international な人たちはもとの国の言語もできるし、また米国では英語を使っているのすごい、というニュアンスが感じられるものが圧倒的に多い。そしてそのなかのいくつかの記述が、英語があまり上手ではないという事実に触れているということも、1 番大切なものの場合と同様である。2 番目に大切なものの 4 番目に多かったのは「異文化・多様性」の大カテゴリーであり、これは回答者達とは異なった文化を身につけていたり異なった生活様式を持っていたりするということに言及している。そして international な人々は、上記の色々な要因の結果、生活の仕方や行動特性、交友関係、仕事内容などが違う、という「性格・行動特性」大カテゴリーの記述が続いている。

1 番大切なものを回答する際には半数に近い学生が「外国人」大カテゴリーの記述を選んだ。1 番大切なものでは選ばなかったものの 2 番目に大切なもの

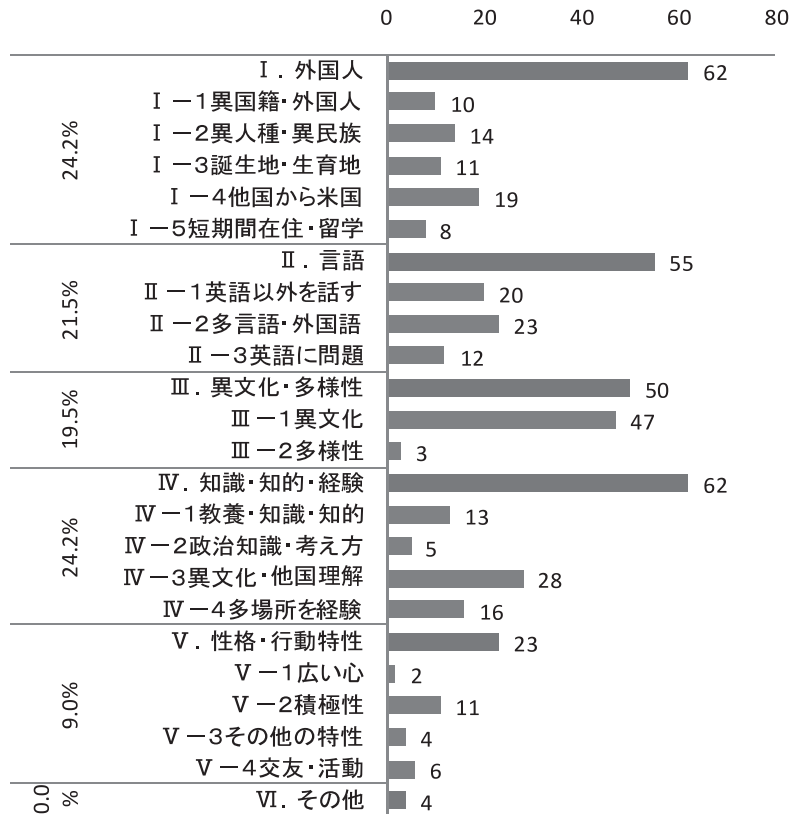


Figure 2. international であることに2番目に大切なもの (256名 256個)

のを回答する際に「外国人」大カテゴリーの記述を選んだ者がやはり最多であった。256名のうち174名が(68.0%)が1番、あるいは2番目に大切なことが“外国人であること”という回答をしていることになり、米国人学生にとってのinternationalの捉えにおいては、外国人であること(国籍が違う、外国人であること、外国生まれや外国育ちであること、他の国から米国に来たこと、外国人として短期滞在する人たちであること)などが強く意識されているということがわかる。

4-3. 性差についての検討

internationalであることに一番大切なものの回答を男女別に分けてその分布を見たのがFigure 3.である。全体の男女の回答の分布の形はよく似た形となっており、回答の比率はほぼ同様の傾向がある。

男女ともに一番大切なものとして「外国人」大カテゴリーの回答を最も多く挙げていること(男性: 47.2%、女性 40.0%)、他の各大カテゴリーの記述の多さの順など、全体としての回答傾向は同様であるが、小カテゴリーの記述数については少し違いが

見られる。‘誕生地・生育地’小カテゴリーの記述は男性に多く(男性: 14.6%、女性: 3.0%)、‘異人種・異民族’小カテゴリーの記述は女性のみに見られた(女性: 4.3%)。また、男女ともに3番目に多かった大カテゴリーは「異文化・多様性」であるが、この大カテゴリーに分類される記述は、女性の方がはるかに大きな比率で記述している(男性: 10.1%、女性: 20.1%)。以上の相違点は、女性の方がinternationalな人々が自分達とは異なる文化・生活様式を持っているということに、より敏感であるからではないだろうか。つまり男性の方は、internationalな人々とは単によその国で生まれて米国に来た人であるというという移動の事実に関心があり、女性の方はそういう人々が身につけているもの(異なった文化や異なった生活様式)により多くの関心がある、という関心の持ち方の傾向の違いが感じられる。

2番目に多かった「知識・知的・経験」大カテゴリーに分類される記述では、あまり大きな男女差は見られなかった。強いて言えば、‘他場所を経験’小カテゴリーの記述が女性に多かったことぐらいであ

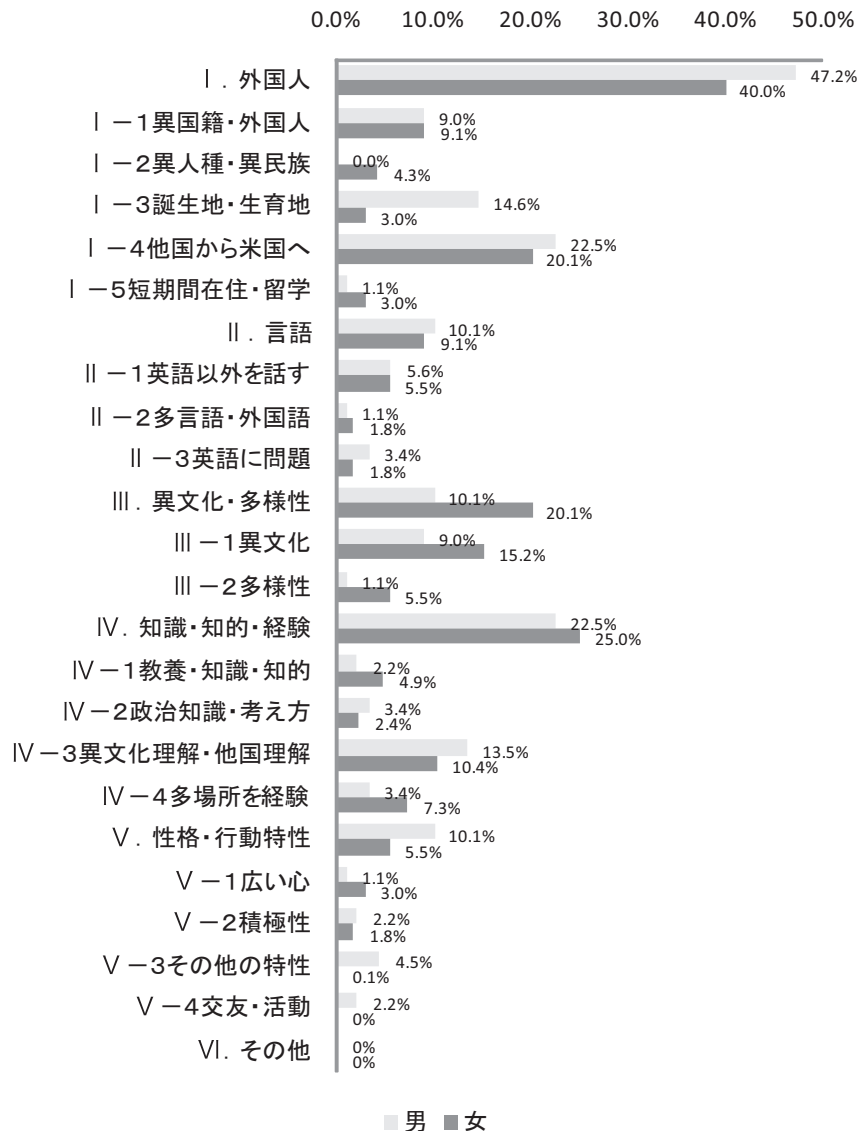


Figure 3. international であることに1番大切なもの（性別）

る。また4番目に多かった「言語」カテゴリーに分類される記述については、記述比率については大きな男女差は見られなかったが、「英語に問題」小カテゴリーの記述が男性の方が多い。これは、前述したように多少の語学に関する優越感を感じさせる記述である。また、記述数の最も少なかった大カテゴリー「性格・行動特性」の中の「その他の特性」小カテゴリーの男性4、女性1の記述のうち unique という男女各1つずつの記述を除くと残りの男性の3つの記述は different characteristics, patriotic, confused となっており、多少の優越感・差別感が感じられる。「英語に問題」の記述数は男女各3で実数は同じだが比率においては男性の方が多かったことから考えても、international である人々に対する

いくばくかの優越感・差別感を持つ人は、男性の方に多いかもしれないと感じられる。しかし今回の調査の母集団はあまり大きくなく、またこのような記述をした男性回答者は数人であったことを考えると、このことを安易に一般化することはできない。

4-4. 年令差についての検討

年令別グラフ (Figure 4.) をみると、「外国人」大カテゴリーの記述が多いのはどの年令層においても同じであることがわかる。そのなかで21才までは年令が上がるほど記述比率が高くなっており、22才以上で下降している。「言語」大カテゴリーの記述は18才が最多である。「異文化・多様性」大カテゴリーの記述は18才が最多比率であり、年令が上が

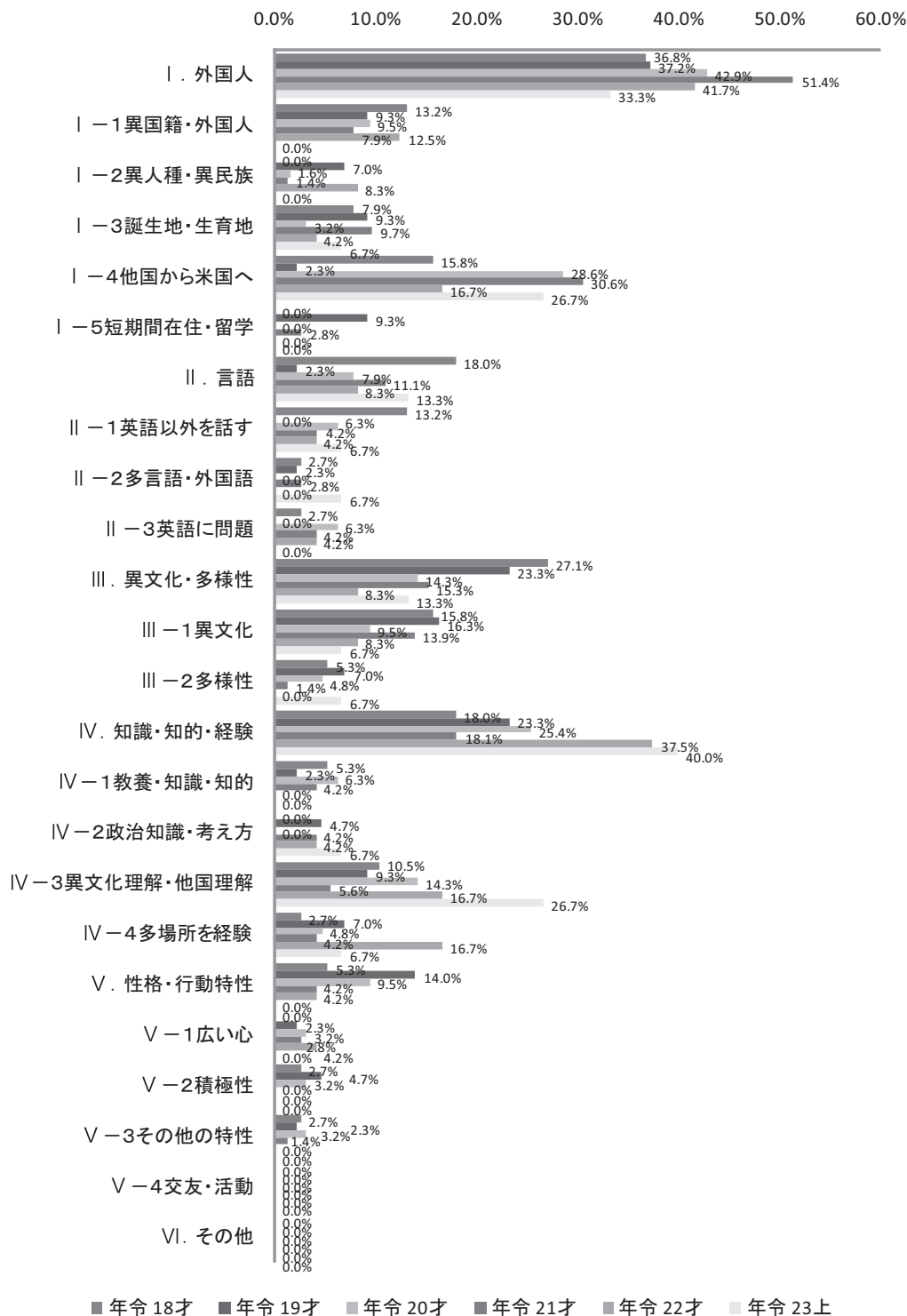


Figure 4. international であることに1番大切なもの（年令別）

るにつれて低くなる傾向にある。「知識・知的・経験」大カテゴリーの記述は逆に年令が上がるほど多くなり23才以上が最多となっている。

これらのことから、年令が高くなっていくにつれて国籍や言語や生活様式が異なるなどの外側から見える違いに注目することが少なくなり、逆にその人の内面のことに注目した回答が多くなっているよう

に思われる。‘異文化理解・他国理解’小カテゴリー（異文化理解の心がある、他国理解ができるなど）や、‘政治知識・考え方’小カテゴリー（世界の政治知識がある、globalな考え方ができるなど）の記述比率が突出して多くなっている結果、「知識・知的・経験」大カテゴリーの比率が各年令の中で最大比率となっている。これはおそらく、一般的に人を見る

ときに、年齢が上がるほどにものの見方も広くなり、各人がその人の内面に持っている考え方、知識、経験などをより重要なこととして考慮することができるようになるということではないかと思われる。この調査の場合で言えば、すぐに目につく外見や外国人であるという事実、外国語ができるという事実以外の、異文化理解の心、能力、考え方、知識、などに注目する傾向が少しずつ強くなると理解することができるかも知れない。しかし今回の調査では調査対象が大学学部生であって年齢幅が小さく、23才以上の学生数がごく少数しかいなかったということもあり、それ以上の年齢の人の傾向を詳しく見ることはできなかった。この点を明らかにするには、より高い年齢の人たちに対する同様な調査が望まれる。

4-5. 専攻による違いについての検討

今回の B 大学における調査は、教育学部教員の担当授業内でその授業時間を利用して配布・回収を行う形の調査であったため、調査対象者は日本でいういわゆる文系に偏った結果になった。その結果、あまり専攻別の検討ができるようなデータ分布ではない。しかし、教育学系専攻と経済系専攻とで同定できる調査対象者は相当数あったので、ここではその2つの専攻グループ間で、何らかの回答の相違傾向があったかどうかのみを検討することとしたい。Figure 5. に international であることに一番大切なことの回答記述の比率を、教育学系、経済系の2グループ間で比較したものを示したが、あまり大きな相違は見られなかった。

強いて言えば「外国人」大カテゴリーのなかで、

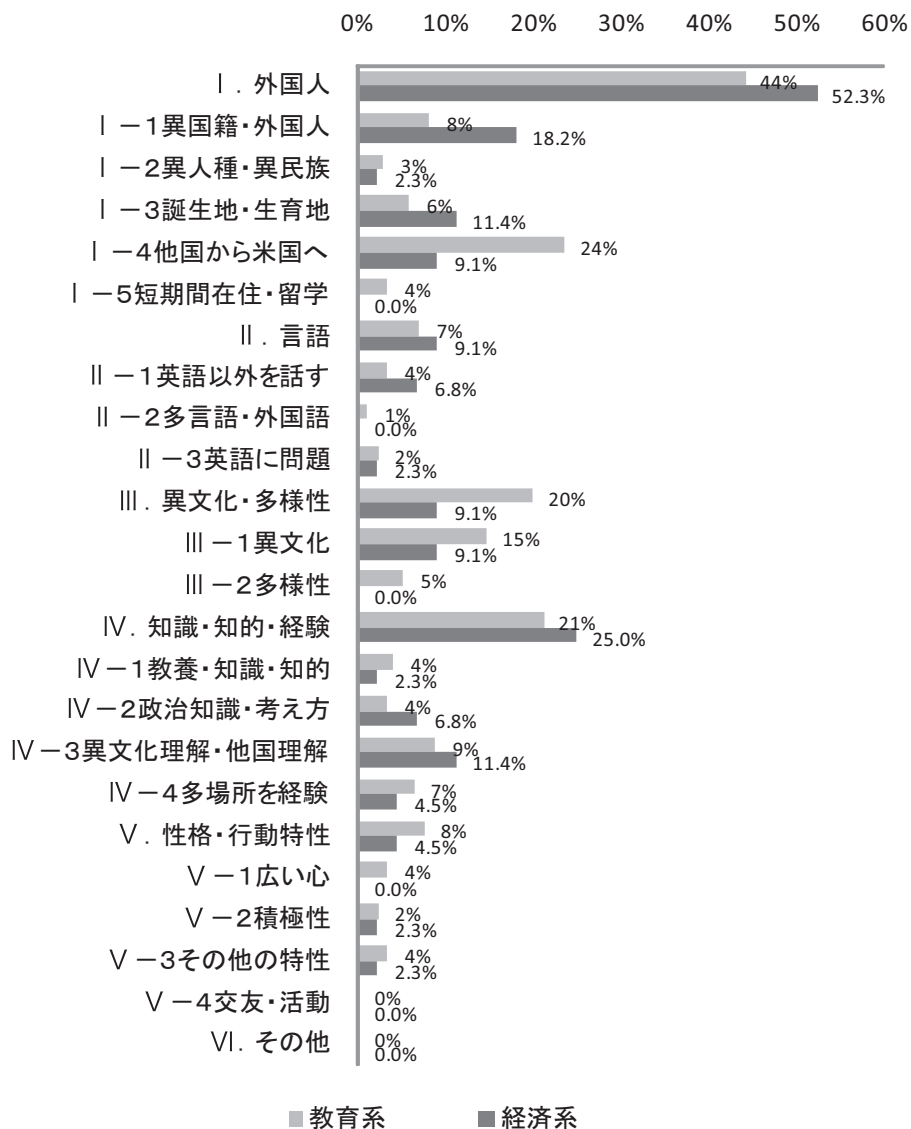


Figure 5. international であることに1番大切なもの（専攻別）

経済系学生の方が‘異国籍であること’、‘誕生地・生育地が異なる’ことの方を重視する傾向が見られ、また教育系学生の方が、‘外国から米国に来た’人たちであることを重視していることが挙げられる。さらに「異文化・多様性」大カテゴリーでは教育学系の学生の比率が高くなっている。B 大学教育学部には international studies の専攻があることから関連の授業も開講されており、受講した学生は受講していない学生よりも、外国からの学生が異文化を身につけ多様性に富んでいるという認識を持った可能性がある。また最近の教育界においては、障害児者や異文化を持つ人々などに限らず個人の多様性（diversity）を尊重する教育が重視されていることから、教育系学生にはそのような学部の空気が反映しているということも考えられる。

4-6. 学生の国際性自己評定と異文化に対する積極性等について

4-6-1. 自己の international であることについての評定結果

自分はどの程度 international であるか、という質問に対して5段階評定をしてもらった結果を、Table.2 に示した。

Table 2. international であること自己評定 (n=261)

	回答人数(人)	比率
1 : above average	8	3.1%
2 : slightly above average	24	9.2%
3 : average	53	20.3%
4 : below average	59	22.6%
5 : little or none	117	44.8%
	261	100.0%

Little or none あるいは below average と回答した学生は 176 名 (67.4%) に達しており、さらに 20.3% の学生が average と評定している。平均より上であるというのはわずか 32 (12.3%) であった。つまり半数以上の人が自分はほとんど international ではない、または平均以下と評定している。この結果は、international であることをどう捉えているかということと関連している。international であることに 1 番大切なことを外国人であることと捉えてい

る米国人学生が多かったことから、現時点で米国国内にいる自分は international ではないという判断が出てきやすいだろう。外国に居住経験がある者や外国旅行の経験のある者が主に、自分たちは多少は international であるという回答をしている可能性があると考えられる。

4-6-2. 現代社会において international であることは有用か

現代社会において international であることはどれほど有用であるかという質問に対する回答結果を Table.3. に示した。この質問に対して大変有用 (very useful) 104 名 (40.0%)、有用 (useful) 113 名 (43.5%)、を加えると有用であると答えた者は実に約 83.5% に達している。

Table 3. international であることの有用性 (n=260)

	回答人数(人)	比率
1 : very useful	104	40.0%
2 : useful	113	43.5%
3 : Neutral-cultural awareness is neither useful nor useless	33	12.7%
4 : slightly useless	5	1.9%
5 : not useful at all	5	1.9%
	260	100%

調査対象者は留学生を多く受け入れている大学で学んでいる大学生である。キャンパス内では、数多くの留学生にすれ違い、またほとんどの授業に留学生が受講登録をしている。調査対象者の約半分近くが international であることに 1 番大切なこととして「外国人」大カテゴリーの回答をしている。彼らが日頃接する international な人たちといえば、身の回りにいる留学生である。米国人学生は留学生が言語上の困難を克服しながら、また異なる文化的背景を持ちながらも、米国文化や米国の社会システムを学びながらたくましく勉学を続けている様子を見ている。留学生が次第に英語をうまく話すことができるようになり、異文化への理解が進み、知識経験が豊富になり、性格や行動特性にもその経験が良い影響を及ぼしているらしい様子を見ることによって、この米国滞在 (留学) 経験が今後の現代社

会を生きていくうえで色々な意味で役立つだろうと考える米国人学生が多いのではないだろうか。

現代社会において international であることが役立つという考え方は米国人大学生にはかなり浸透していると考えて良いだろう。留学生のたくましさを見るにつけ、また留学生のがんばりを見るにつけ、米国人学生の場合もそのような経験の機会があれば、それが自分の考え方をえたり、多くの知識や経験を得ることにつながるだろうと考え、そのような人格成長、経験が現代社会の中で自分がより良く生きていく上で有用であるという判断をしているのではないかと考えられる。

4-6-3. international になるよう努力をするか

上記の2つの質問項目に対する回答から、ほとんどの米国人学生が、自分はあまり international ではない、しかし international であることは現代社会において大変有用であると考えていることがわかったが、それならば、international になるように努力をするという回答は多いのではないかと予想された。結果は Table.4. に示したように、予想の通りであった。一生懸命努力する (great effort) は 36 名 (13.8%)、普通以上努力する (above-average effort) が 67 名 (25.7%) であり、この2つを合わせると 39.5% が努力をすると回答している。少しは努力する (some effort) 118 名 (45.2%) を加えると実に 84.7% が努力すると答えている。

Table 4. international になるよう努力する程度 (n=261)

	回答人数(人)	比率
1 : great effort	36	13.8%
2 : above-average effort	67	25.7%
3 : some effort	118	45.2%
4 : little effort	29	11.1%
5 : no effort at all	11	4.2%
	261	100%

前述したように、international であることは外国経験をしていることという回答が圧倒的に多いということから考えると、調査対象者の多くは、将来外国経験をしたいという気持ちを持っていると理解することができる。その形は留学であるか、仕事なの

か、旅行であるのかというところまでは明確ではないが、何かの形で外国経験をしたいという希望は強いようである。世界を旅行していると、大学学部卒業ののち、仕事についたり大学院に進学したりする前にバックパックをかついで長期旅行している米国の若者にしばしば出会う。米国社会ではこういうライフスタイルは決して珍しいことではないようであるが、このことは、以上のような international であることが有用であるという考え方と無関係ではないだろう。

4-6-4. 今後の自分の外国経験についての考え

今後外国に行くことについてどのように考えているかを5つの文章から選択することで回答を求めた結果は、短期間住んで見聞を広げたいが 115 名 (44.2%) で最多であり、次いで休暇旅行でなら行きたいが 66 名 (25.4%)。長期間住んで文化を学びたいが 53 名 (20.0%) であり、この3つを合わせると 89.6% が外国経験をしたいと考えている。中でも単なる旅行ではなく長期間ないしは短期間外国に滞在したいと考えるものが 64.2% もいることは特筆に値する。前項の international になるように努力したいという気持ちと相まって、近い将来自分自身が international になることを経験し、それを通じて異文化に対する理解を深めたり、いろいろな知識を獲得したりしていくことを希望しているようである。

Table 5. 外国に住むこと・旅行への希望 (n=260)

	回答人数(人)	比率
1 : 長期間住んで文化も学びたい	52	20.0%
2 : 短期間住んで見聞したい	115	44.2%
3 : 休暇旅行なら	66	25.4%
4 : 必要でないなら行かない	18	17.0%
5 : 絶対行かない	4	1.5%
1 or 2	1	0.4%
2 or 3	4	1.5%
	260	100%

4-6-5. 米国国内での外国人との交流志向

米国国内での外国人とのつきあいについては、交

流を楽しめると答えた者が126名(48.5%)となっており、半数近くが外国人との交流を肯定的に受け止めている。外国人学生と日常的に接する大学のキャンパス環境がそう感じさせているかも知れない。しかし、避けたいという拒否的な者こそ少ないが、ボランティアならしてもよい60名(23.1%)、非積極的であるが必要であれば61名(23.5%)と、キャンパスという比較的進歩的な環境の中にあっても、あまり外国人との交流に積極的ではない人も半数近くいるという事実も見えてくる。米国は外国人・異文化に開けた国であり、また個人の自由を尊重する国である。いわゆるメインストリームの米国人(その多くがいわゆる WASP といわれる人々である)は、このような観点から異人種や異文化を持った人々の米国内での存在を認め(事実多くの異文化・異宗教・他人種の人々がその文化を持ったまま米国内に居住している)、彼らの自由を尊重するけれども、関わりは最小限にしたい。自分達は自分達、あの人達はあの人達、とする空気も米国内には確かに存在することを忘れてはならない。

Table 6. 外国人との交流意欲 (n=260)

	回答人数(人)	比率
1: 交流を楽しめる	126	48.5%
2: ボランティアならしても良い	60	23.1%
3: 非積極的だが必要であれば接触する	61	23.5%
4: 避けたいが必要であれば話す	4	1.5%
5: 接触しないようにする	1	0.4%
1 or 2	8	3.1%
	260	100%

4-6-6. 文化的態度

ここでは異文化に接した時の自文化異文化に対する考え方として、自分はいつも米国文化中心でいたい(自文化中心主義)、自文化も異文化もどちらも積極的に学んで自分に取り入れたい(積極的折衷主義)、自然にまかせればよい(消極的折衷主義)、2つの文化を統合しようとするとうマージナルになる(統合は無理)、の4つの文化的態度についての記述の中から最も自分の考えに合うものを選択させ

た。260名の回答結果は、自文化中心主義7名(2.7%)、積極的折衷主義的202名(77.7%)、消極的折衷主義49名(18.9%)、統合は無理2名(0.8%)であった。積極的に他文化を知りたいという積極的折衷主義的回答の極端な多さは、外国経験を志向している回答者が多かったこと、また外国人との交流を楽しめるという回答の多さに対応している。

4-6-7. これまでの海外経験

半年以上の留学または海外滞在経験の有無、外国旅行の経験の多少や回数、主な旅行先、日数などをたずねたが、今回の調査の調査対象者たちで半年以上の海外滞在経験のない者が248名(95.4%)、ある者は12名(4.6%)であった。また外国旅行経験は数回91名(35.0%)、1度81名(31.2%)、ない87名(33.4%)であった。米国大学の学部生段階では滞在、旅行を含めて、まだ海外経験が少ないものが大多数のようである。

4-6-8. 外国人との交流経験

外国人との交流経験では yes が143名(55.2%)、no が115名(44.2%)であった。B大学は大都市の街中ではなくいわゆる田舎の大学町にあり、大学人以外との交友関係が広がりにくいという地理的・環境的条件、また娯楽としてのパーティが大学生同士で頻繁に行われていること、キャンパス内には多数の留学生がおり米国人学生とともに同じ教室で学んでいるということから、外国人との交流の経験を持つものが比較的多い結果になっているのではないと思われる。この数値は日本の大学学部生と比較するとかなり高いと思われる。しかし回答者の中にはまだ大学入学後年数の少ない者もあり(教育年数1年:43名、2年:45名、3年:78名、4年72名、5年以上24名)また、外国人との積極的な交流の意志を持たない者もいることから、交流経験がないという者も相当数存在する。

5. 総合考察と今後の課題

米国人学生にとって international であることのもっと大きな要因は外国にいくこと、外国に行くことである。そして自分自身が外国に行った経験のない

ほとんどの学生にとって、身近な international な人々、というのは米国内で暮らしている外国人、特に大学内にいる留学生である。international であることで大切なことは“外国人”“外国・異なる国から来たこと”“国から国への移動”のような記述が圧倒的に多いというのがそれである。その次に多い大カテゴリーの記述は、その人たちが教養、知識があり知的であるというものである。外国からやってきた人たちは一般に多くの経験をしており、教養もあり、知的に貪欲であり知識もあるという外国人イメージは、おそらく大学における留学生の日常を見聞することにより培われたものであろう。そしてこれは、まだ海外に出たことの少ない米国人学生にとって、自分たちが international な経験を深めれば、多くの知識を得、考え方も広がって現在よりも知的に優れた存在になるであろうという、international になることに対して肯定的な感覚を養っていることを推察することができる。

米国では現在においてもアメリカンドリームを求めて、またよりよい生活環境を求めて外国から移住する人たちが後を絶たない。米国社会は建国以来ずっと外国人を受け入れ続けて来た。近年の不景気による失業率の上昇で、自分たちの生活を脅かす存在としての新しい移民に対する反感も出てきているようだが、概して米国社会は移民に対しては鷹揚である。また B 大学にはいろいろな国からの多人種多民族の留学生がごく普通におり、教室の中でもごく普通に机を並べている。それには財政的な見地からも留学生を積極的に受け入れようという大学の姿勢もさることながら、いまや世界共通語ともいえる英語を学び、それを使って勉学をし、将来に役立てようという留学生側の強い動機もあって現在のようなキャンパスになっていると考えられるが、米国人学部学生もそのような環境の中に身をおいているこ

とにより、様々な影響を受けていると考えられる。

英語における international という語の使われ方は、日本における国際、国際的、国際性、という語の意味するところは異なるニュアンスを持っているといわれている（江淵 1997；光田、1999）。米国では日本という“留学生”を“International Students”と呼んでいるが、このような語の使い方の違いについても考慮する必要がある。これまで述べてきた B 大学で行った本調査の結果を理解するにあたっては、米国人大学生の場合、international であるということのイメージの作り方が日本人におけるそれとは発想の異なるものであるらしいことも忘れてはならない。

本稿では B 大学における調査の結果を報告したが、ここで報告した調査内容は、日本国内 A 大学で行われた調査とほぼ内容を同じくするものである。米国における学部学生の international であることの捉え方、日本における学部学生の国際性の捉え方、この両調査の結果を総合的に考察することによって、更に見えてくる点は多いと思われる。次稿では双方のデータを対照しながら米国人学生の回答傾向と日本人学生の回答傾向の異同を明確にし、特に両校の学生の international であることの捉え方、国際性の捉え方の相違点について、米国社会・日本社会の現状を視野に入れながら検討し考察していく。

（本研究は中部大学特別研究費 A（課題番号 22 I L17A）の助成を受けて行ったものの一部である。）

引用文献

- 江淵一公 1997「大学国際科の研究」玉川大学出版部
- 早矢仕彩子 2009 大学生の国際性意識に関する研究 中部大学現代教育学部紀要 1, 141-155.
- 光田明正 1999「国際化とは何か」玉川大学出版部

受付日 2010 年 9 月 30 日

受理日 2010 年 11 月 30 日